



革新懇
インタビュー

たかす なおみ
鷹巣 直美さん
たけうち やすよ
竹内 康代さん

(「憲法9条にノーベル平和賞を」実行委員会)

「憲法9条にノーベル平和賞を」実行委員会 「9条にノーベル平和賞を」と訴える鷹巣直美さん(写真右)のよびかけに応じ、相模原市や座間市の地域九条の会会員などが、2013年8月に結成した。竹内康代さん(同左)は4人の共同代表の一人。発起人の鷹巣さんは実行委員をつとめる。

撮影・片桐貞喜

私たち一人ひとりが

ノーベル賞候補です

神奈川県座間市の子育て主婦、鷹巣直美さん(当時36歳)がノーベル委員会にメールを送り始めたのは、2013年1月でした。

鷹巣 改憲をめざす安倍さんの第2次内閣ができた直後です。メール文は「日本国憲法第9条にノーベル平和賞を授与してください」、これだけでした。数回出して何の返事もありません。知人にネット署名の仕方を教わり、試しに立ち上げてみたところ、5日間に1342人の方が賛同してくださったのです。

署名をノーベル委員会に送ると、今度は返事がきました。「平和賞候補になるには、推薦資格を持つ国会議員や大学教授の推薦状がいります。平和賞を受けられるのは個人が団体なので、憲法は対象ではありません。そこで、授賞対象を「9条」から「9条を保持している日本国民」に変え、推薦人を募りました。

やがて、実行委員会が結成されます。

鷹巣 うれしい反響が広がる。同時に、一部ではネットで誹謗中傷されていると知って心細くなり、近くに仲間がほしいと思いました。近所の九条の会に相談を持ちかけたところ、竹内さんたちと出会ったのです。

竹内 新聞記事で鷹巣さんの活動を知り、地元の九条の会におよびして話をしてもらいました。すると、参加者の目が輝いてきたんですよ。みんな、これは夢のある運動だと感じたのです。鷹巣さんを支援すると決め、実行委員会をつくり、署名集めや推薦依頼にとりくみ始めました。

戦争の悲惨語り継いできた「日本国民」

受賞対象を「日本国民」としているのには、様々な意味が込められています。

鷹巣 日本国憲法の主語は「日本国民」です。主権者は国民ですから。その「日本国民」が9条を保持してきたのです。戦後70年にわたり、大勢の日本国民が平和への願いを込めて戦争の悲惨さ、愚かさを語り継いできました。戦争を知らない世代を含め、9条を保持していることを誇りにし、自分たち一人ひとりがノーベル賞の候補だと思ってくれるといいですね。

もちろん、9条に対しては別の考えをお持ちの方がいます。私たちの運動が、考えの違いを超えて「日本国民」一人ひとりが9条について考えるきっかけになれば、とも思っています。

竹内 街頭で署名を集めていると、通り過ぎて行った若者が戻ってきて聞きました。

「僕もノーベル賞候補になれるんですか?」。2014年4月にノーベル委員会から「推薦を受理した」と連絡がきた時は、ほっとしました。

「日本国民」に受賞資格があると認められたのですから。鷹巣 2014年は受賞できませんでしたが、その年の9月にノーベル委員会から、2015年ノーベル平和賞候補推薦への招待状が届きました。すでに、国会議員を含む推薦資格のある先生方が推薦状を送ってくださいました。竹内 いま、九条の会などを平和賞候補に推す動きもありますね。「日本国民」のどなたが候補になるにしても、私たちが応援します。

世界中の人々の願いをかかなる憲法9条

「9条にノーベル賞を」の運動は、世界に広がっています。

鷹巣 ことし1月、コスタリカ国会が特別決議を採択しました。「平和憲法を長年にわたって保持してきた日本とコスタリカ両国民に、共同でノーベル平和賞を」と。韓国では、国会議員や各界識者50人が9条関連の候補をノーベル平和賞に推す運動をおこなっています。「憲法9条にノーベル平和賞を」という運動は、たくさんの方の平和への願いを支えられて世界へ一人歩きしています。私に「あなた、

すごいね」といわれる方もいますが、すごいのは私ではなく、世界の誰もがもつ「戦争はいや」の願いをかえようという9条です。

私は、「満州」引揚者の祖母に戦争の話をよく聞かされてきました。20歳から5年間留学したオーストラリアでは、通っていたキリスト教会でアフリカの戦乱を逃れてきた難民に出会い、若者や女性たちの涙ながらの体験談を聞きまわりました。過去ではなく今の出来事として、つくづく戦争はひどいと思いました。帰国して、教会の牧師さんに日本国憲法の前文と9条を教わったのです。「すばらしい。これこそ神様も喜ばれることだ」と、目を開かれました。

「自分の子ども、世界の子ともたちのために9条を守る」。鷹巣さんの決意です。

鷹巣 改憲の動きに対し、私たちが声を大きくしないと。日本国憲法が私のような人間でも声をあげられる環境をつくってあげられていると思いません。その気になれば、一人一人にできることは決して少なくないはず。昨年ノーベル平和賞を受けたバキスタンの少女マララさんが厳しい環境の中で声をあげるのとは訳が違います。自分に、そっくり聞かせています。

【聞き手 卯城公啓】